



Hiroshima City University Language Center

広島市立大学語学センター
Newsletter No.35 (2009.9.4)



デザイン刷新！センターが後期、第四世代に

来年度には、初の可動ブース教室も検討

語学センターの機器は5年毎に二期（2年）に渡って更新が行われています。ニューズレター33号で簡単にご紹介しましたが、夏期休暇中の現在、その第一期機器更新が行われています。（右下図網掛け部分参照。）更新対象となる教室は403A、403B、404教室の3つで、その他にスタジオ・編集室、共同研究室が含まれます。今回の機器更新でどのように変更するかを以下にご紹介します。なお、更新後のご紹介は次号に予定しています。

目次：

センターが後期、第四世代に.....	1
ミニコラム：	
情報科学研究科 末松先生.....	2
Hiroshima and Peace.....	2
教員免許状更新講習.....	2
ヒロシマ人宛書簡4.....	3
在米卒業生寄稿	
他.....	4

語学センター・語学教務員 堀本 真由美

●コンソールの操作性の向上

まず、各教室の学生ブース数が増え、暗幕が設置されます。それから、教室システムやパソコンにインストールされるアプリケーションがアップグレードされ、OSはWindows XPからVistaに、Microsoft Officeは2003から2007に変更されます。また、今回の機器更新ではMacintoshをお使いの先生方の利便性にも配慮し、教卓の教材送出装置の一つとしてMacintoshも設置されます。視聴覚機器については、近年のメディアの変化や多様化に伴い、各学生ブースに設置してあったMDデッキが撤去されますが、教卓では新たにBlu-rayが使用できるようになります。

平成16年度以降これまでの語学センターCALL教室環境は第三世代に当たり、歴代の語学センター教室の中では最もシステムが安定したものでした。そのため、今回の機器更新では、安定した環境が不安定にならないことが絶対条件であり、さらにより使いやすく洗練されたものになることが望まれています。

かつて、「トラブルで授業を中断したくない」「操作が複雑でよくわからない」というのが、CALL教室の利用が敬遠される主な理由として挙げられる時代もありましたが、今回の機器更新ではコンソールや機器の操作性の更なる向上も期待されます。教卓コンソールでは「DVDを視聴する」など、使用教材や目的に応じてボタン一つで操作できるようにプリセットが可能になる予定です。

●教室機能は利便性が向上

語学センター各教室には基本となるCALL機能に加えそれぞれ異なる機能がありますが、今年度の更新ではそれらの変更はせず、利便性を向上させる仕様になっています。例えば、403A教室の教室録画機能は、英語の教科教育法の授業で模擬授業を撮影し、その後再生しながら意見交換



◆語学センターフロア図
< >内は各教室の主な機能

をするなど、様々な活用がされてきました。これまでは映像を直接DVDに録画するものでしたが、今回の更新では動画ファイルにして利用するという方法を採用するため、DVDファイナライズの手間が省けるようになります。また、403A教室と403B教室を連動させて合同授業をする機能は、これまでは403A教室から教室の映像音声と教師用PCの画面を一方的に403Bの学生に送出するというもので、403A教室にいる教師から403B教室内の学生の様子がよくわからないという欠点もありました。それが、403A教室のシステムコンソールで403A・403B両教室の学生のPC画面・音声モニターができるようになり、さらに、403A教室と403B教室を仕切る壁にドアが新設され、教員が廊下から遠回りしなくてもすぐに隣の403B教室を窺うことができるようになります。

●各教室テーマはそのまま、デザインを刷新

前回の機器更新で各教室のテーマとテーマカラーを決定し、当時、語学センター専門委員をされていた芸術学部の吉田幸弘先生にご協力いただいて配色したデスクやイス、カーペットは再利用されますが、デスクは教卓・学生ブース共に新しいデザインになります。今後、新しく快適な教室環境がどのように活用されていくかが楽しみです。

ミニコラム 外国語に想う【30】

「縮みゆく世界」

所謂先進国を訪れると、日本との違いを感じることもむしろ差が小さいと感じることが多い。見慣れたファースト・フード店があるなどの表面的なところもそうだが、思想や価値観などにおいてもそうである。よく言われるように、世界は狭くなってきていると感じる。

サトクリフの「ともしびをかかげて」で描かれた、グレートブリテン島での文化も言語も異なる民族の争いは、かの島がかつていかに広がったかを感じさせてくれた。技術の発展による人や物の流通が地球を着実に小さくして来た。そして、インターネットによる情報流通の爆発でそれは一気に加速された。

言語は文化の媒体である。明治時代には西洋の知識を吸収するために、西洋の文献が猛然と日本語に翻訳され、その過程で日本語も高められたという。おかげで、海外文学を日本語で楽しむこともできる。しかし、ここまで世界が狭くなると翻訳では間に合わない場面も多い。今や世界共通語となった英語を直接使うことが切実に要求されている。さあ、語学センターを活用しようではないか。

情報科学研究科 准教授

末松 伸朗



Hiroshima and Peace ～自習室での支援と学生の事前学習会～

今年で7回目となるHiroshima and Peace(以下H&P)が7月28日～8月7日(大学院生は8月10日まで)に実施されました。60名の参加者の内、半数近い25名が外国からの参加となりました。中でも、キューバからの参加者を迎えるのは今年が初めてとなり、これまで以上に様々な視点から平和についての画期的な議論が期待されました。その他にも、リビアやクロアチアなどからの参加もあり、今年のH&Pはまさに世界の縮図となっていたようです。

語学センターでは、例年通り自習室をH&P受講者にも開放しました。さらに今年は、そのような世界各国から、Š w ŋ ž ȣ ; é ½ ß É Å Œ ħ v インターネット経由で、無料の音声通話、ビデオ通話、インスタントメッセージを利用できるソフト)も特定のパソコンに導入し、自由に使用できるように対応しました。

その他、語学センターの教室を使用して、市大の受講生の自発的な企画によるH&Pの事前学習会が、7月中旬に行われました。この学習会は、広島市の被爆の様子をDVDで鑑賞し、原爆に関する知識を事前に深めるという目的でした。当初の計画では、日本人学生だけが参加予定でしたが、H&P開始より数日早く到着した海外からの受講生も2名加わり、全て英語での学習会となりました。H&Pは今年度も無事終了しましたが、語学センターでの事前学習会が授業でいかに活かされたかを、またご報告できたらと思います。

*** H&P集合写真はポスターにて語学センター自習室に掲示しています。**



自習室を利用するH&Pの外国人学生



キナー先生の指導を受ける受講生

今年度制度改正、教員免許状更新講習がスタート ～集中英語トレーニングと徹底したスピーキング訓練～

広島市立大学では、教育職員免許法の改正に伴い、教育職員として必要な資質、能力が保持されるよう、最新の知識技能を身に付ける機会を提供する「教育職員免許状更新講習」をこの夏初めて実施しました。

語学センターでは、7月29日～7月31日の3日間の日程で、青木教授と渡辺准教授が講師を務める「集中英語トレーニング講座」を、広島県及び岡山県の中学・高等学校の英語教員8名の方々の参加を得て実施しました。

プログラムは、本学が独自に開発したネットワーク型集中英語学習プログラムを利用し、リーディング・リスニング・文法を訓練するとともに、ネイティブ講師によるスピーキングの徹底指導も行い、より実践的な内容としました。

その他、講習1日目と3日目に、TOEICテストとTOEICスピーキングテストを実施し、学習効果を測定するなど内容の充実に努め、受講者から好評を得ることができました。

周一四方のまなび 1

9月のヒロシマ：血の調査

加藤周一は血液学が専門の医者だった。彼は64年前に2度、多くの戦争被災者を診た。

1度めは3月10日、10万人以上が焼死し、総罹災者は100万人以上という東京大空襲である。

本郷の東京大学構内にも爆弾は落下した。東大病院に爆傷者がおしよせトラックで運びこまれた。前々年9月から内科科学教室の医局に副手として勤務していた25歳の加藤周一は運びこまれた患者の診療に全力を尽した。「そのときほど我を忘れて働いたことはなかったし、またそのときほど我を忘れて働く人々の仲間であったことはない。

(中略)爆撃機が頭上にあったときに私は孤独であった。爆撃機が去った後の数日ほど、私が孤独でなかったことはない」と45年8月15日までの自伝『羊の歌』岩波新書1968、に記している。

堀田善衛全集の月報に寄せた文で、堀田は東京大空襲に際して鴨長明「方丈記」を思い起こし『方丈記私記』を書いたが、加藤にとっては「それどころではなく」「あとからあとから運びこまれて来る火傷患者の手当てに忙殺されて他の何事も考える暇もなかった」と自分と対比している。

医学部教育は軍医養成が主目的となっており当時、医局在勤者は10数名だったという。

なお加藤周一の父はかつて東大病院医局長だったというが、私事にクールな『羊の歌』の慎重な叙述では名前ひとつ記されてない。

1945年8月15日は終戦ではなく「敗戦」の日だと僕は意識してきたが、1945年9月から1960年までを扱う『続 羊の歌』では終戦でも敗戦でもなく、もっとナマに「降伏」という。降伏した国に「駐留」ではなく「占領」軍がやってきた。

米国の軍医たちが東大病院内科教室に現れ、被爆者の「血液塗抹標本」を顕微鏡で検査した。

この病院には、仲みどりという被爆者が単独、自力でたどりつき8月16日入院、24日には手当てのかいもなく死んでいた。移動演劇さくら隊の女優。東大病院が知る最初の原爆症例。当時血液学専門医が3人いたうちの1人、加藤医師は当然知る立場にあったはず。医師の倫理によってか患者名は記されずこの件については触れられてない。

「広島には一本の緑の樹さえもなかった。」から「彼らが以前の人間にたち戻ることにはできないだろうと思われた。」までの20行余りを、僕は的確な文章だと思う。爆心地にいてそ

の瞬間、炭化(!)した即死者はむろん、負傷者も探索者も介護者も、冷静に観察できるような時間はもちえなかった。ひと月後の他郷の、科学者にして表現者である加藤周一の条件のみが可能にした、そのような的確な、歴史的な名文だという感想を僕は持つ(読め、『続 羊の歌』)。

と同時にそのあとの叙述に対しては、これではまるで被爆者のいうセリフではないかとすら僕は思う。《ノー・モア・ヒロシマ》というスローガンさえもが「ああ、それはちがう、どこかがちがう」「それだけではないだろう」という気をその後の加藤におこさせた、というのだ。

『続 羊の歌』の2章め、「広島」の章のはじまりの3頁(12-14頁5行)。

1945年の加藤周一が被災者を診た2度め。彼はいくさに敗けたオキュパイド・ジャパンの9月の広島に赴き、留り、ヒロシマの「人間を症例に還元し実験室の仕事に専念した」。それは治療しないと非難される、のちのABCCのした事と同じか否か。9月から1ヵ月余、彼は被爆者の血液標本を見つづける。道と川、あとは瓦礫ばかりの原がひろがる全く平らになった奇妙な街、「あまりにも猛烈な破壊的な光景」のなかの、研究所検査室*。米軍輸送機が立川から広島まで「原子爆弾影響[日米]合同調査団」員たる彼を運んだ(機内に公然と貼られた「裸の女の途方もなく大きな写真」によりやく

26歳になろうかという彼は驚かされる。この軍用機があるいは飛行機搭乗初体験であった可能性が大だ)。

加藤先生は、広くは米国の軍事研究に加担したということにはなりません。この答は「なぜアメリカに協力したのか」ということについては、後でいろいろと考えが変わってくるのですが、当時は私にとっても解放軍という面が強く感じられました** だろう。

『続 羊の歌』の広島章は次の文で閉じられる。「私はその後長い間広島を考えなかった。」

改めてその理由を問う成田龍一への加藤の答***。

「……。語ると難しい。人間の苦しみです。被爆者の被害の途方もない残酷さ。」「原爆には、語ることの難しさ、言葉が用意されていないという特徴がある。」

1爆風。2熱波。3放射線——i即死、ii若い細胞の段階的破壊による生存者の数ヶ月後の発症、iii遺伝子破壊。核兵器はそれまでの戦争被害、空襲被爆を一変させた。それは1945年の加藤周一の2度の医療、医学の活動とその回想に照らして明白なのである。

〔*仮設地の「学校」とはどこか? **『二〇世紀の自画像』ちくま新書'05、109頁 ***同、115-6頁〕

(一知半壊小人)



MINERVA SCACCIA I VIZI DAL GIARDINO DELLA VIRTU
マンテーニャ画、1497-1502、ルーブル美術館(部分)

●●●●●●●●●● 卒業生の寄稿

* 市大の中国人留学生だった陳さんが4月に語学センターを訪問してくれました。

「言語を通じて世界を知り、

本当の共存共栄（人を大事にする）という国際理念を理解できる」

1999年度国際学部国際学科卒業

陳 俊傑（アメリカ在住）

今回私は7年ぶりに大学を訪れ、とても懐かしく思いました。一番の印象はやはり大学が綺麗で、勉強の環境がとても素晴らしいということです。語学センターは10年前に比べ、設備が一新されて、自習室はさらに広くなりました。教材の種類も昔より増えて、学生は自分の好きな資料や教材を選べます。大学は学生のためにいろいろなことを考慮していることを感じました。

社会に出て大学での勉強時間がとても貴重だったということをつくづく感じます。大学での勉強だけでは実際の社会を完全に理解できない部分があります。言葉と体験を通して初めて気づくことが多かったです。今の国際社会では語学力がますます重要なツールになってきています。語学力を身につけて外国の人々と交流し、複数の考え方を理解する必要があります。

アメリカでの日常生活の中で、共存共栄、そして相互理解という理念がアメリカに生きていることを毎日実感しています。多民族国家アメリカでは思想や考え方が多様化しています。その環境の中でお互いに尊重し、共存するという心がけが豊かな社会を作る大前提だと思います。これは大学の時に学んだことを実際の社会の中で言語を通して体験できました。ビジネス社会の中でも人を大事にするということ、すなわち共栄が将来を長い目で見た時の本当の豊かさにつながります。

私はいい大学およびいい先生たちに恵まれて、とても幸せに4年間大学を過ごしました。今は言語を通してほかの民族および国の人々と交流することができて、そして自分の考え方を常にリフレッシュできるという喜びを毎日感じています。私は大学そして先生の皆様に本当に心より感謝しています。



◆語学センター事務室にて
青木信之副学長（左）と陳さん（右）

新入生歓迎！アカデミー賞受賞作品上映会

語学センターでは、4月に新入生歓迎映画上映会を開催しました。例年は、冬に上映会を行っていますが、今年度は初めての春の上映会。上映作品は、新旧のアカデミー賞受賞作品の中から全10タイトルを上映しました。

新入生歓迎ということでしたが、新入生に限らず他学年の学生にも広く呼びかけ、参加者数は教職員の方を含め72名となり、これまでの最多となりました。参加して下さったみなさん、ありがとうございました。

提出してもらった感想文には、「この機会に映画が見れて良かった」「また上映会を実施してほしい」「もっと英語を勉強しないといけないと思った」など好意的な意見が多く寄せられました。また、上映会が各国の文化や映像美を堪能したり、語学力向上への機会となったようです。

今年度は、冬に上映会を開催するかは未定ですが、決まり次第また掲示版やニューズレターでお知らせします。語学センターの自習室で今年度の新歓上映会の映画が視聴できますので、見逃した人や視聴したい人は、自習室カウンターに来てくださいね。



たくさんのご参加ありがとうございました。
次回の映画上映会もよろしくお願いします。

視察報告

- 4/30 フリースクール悠学館 18名
- 5/22 瀬戸内高校 23名
- 6/4 兵庫県立大学 3名
- 6/9 山口県立高森高校 44名
- 6/17 文教女子大学附属高校 11名
- 文部科学省 1名
- 6/25 安芸南高校 32名
- 7/2 大塚中学校 2名
- 7/8 千代田高校 23名
- 7/13 安芸府中高校 23名
- 8/4 可部高校PTA 41名
- 8/8,9 オープンキャンパス 164名



可部高校視察風景

発行日 2009年9月4日
発行 広島市立大学語学センター
〒731-3194
広島市安佐南区大塚東3-4-1
編集 堀本真由美
伊達美和子（内線：6410）
Phone (082) 830-1509
Fax (082) 830-1794
E-mail lang@intl.hiroshima-cu.ac.jp
ホームページ
<http://call.lang.hiroshima-cu.ac.jp/lang/index.html>

